

新型コロナウイルス後遺症の主な症状

- ①倦怠感や関節痛などの全身症状
- ②せきや息切れなどの呼吸器症状
- ③集中力低下や記憶障害などの精神・神経症状
- ④嗅覚・味覚障害などその他の症状

新型コロナウイルスの感染者数が道内でも減少傾向となる中、ある程度症状が回復した後も倦怠（けんたい）感や嗅覚異常、せきや息苦しさといった「後遺症」を訴える患者が増えている。昨年流行したデルタ株に比べ、現在主流のオミクロン株は重症化しにくい傾向があるものの、疲労感や頭がぼんやりする「ブレインフォグ」と呼ばれる症状が長期にわたって続く場合があり、厚生労働省は今春から実態調査に乗り出した。専門家は「重症化しにくいと甘く見てはいけない」と注意を呼びかけている。

「回復後も3～6カ月症状が続き、長い場合1年以上通院する患者もいる。精神・神経症状を訴える人が多く、これまでの感染症とは明らかに違う現象だ」。札幌市北区でコロナ後遺症外来を開く今医院の今真人院長は驚く。症状は続くのに検査では異常が見つからない場合がほとんどという。原因がはっきりしない分、「『必ず良くなるから一緒に頑張ろう』という精神的な支援が重要」と話す。

厚労省が昨年12月に作成した後遺症に関する冊子によると、新型コロナの後遺症は《1》倦怠感や関節痛などの全身症状《2》せきや息切れなどの呼吸器症状《3》集中力低下や記憶障害などの精神・神経症状《4》嗅覚・味覚障害などその他の症状—の四つが挙げられる。全国の感染者は累計914万人（6月18日現在）を超え、後遺症に悩む人は相当数いると考えられる。このため厚労省は今春から約2億円をかけて実態調査を始めた。

海外での約1万例の報告では、発症から2カ月か回復から1カ月を経過した患者のうち、72・5%が何らかの症状を訴えていた。症状は倦怠感（40%）が最も多く、息切れ（36%）、嗅覚障害（24%）、不安（22%）、せき（17%）、抑うつ（15%）と続く。

原因ははっきりしないが、ウイルスに感染した肺の組織など直接的な障害に加え、感染後の免疫の調節がうまくいかず体内で炎症が起きることなどが考えられている。英大学の

研究では軽症でも脳がわずかに萎縮し、記憶と嗅覚をつかさどる部分が減少したとの報告もある。ただ、時間がたてば回復するのが一般的だ。

今医院の場合も発熱外来で感染が分かった220人のうち、約1割の20人が後遺症を訴えたという。今院長は「変異株の種類による後遺症の発症率に差はないというのが実感だが、オミクロン株の感染者数は圧倒的に多いため後遺症に悩む人も増える」と指摘する。

勤医協札幌病院で後遺症患者を診察する尾形和泰院長は「感染者が多いからか、20～30代の若い世代の受診者が多い」と話す。

尾形院長は、倦怠感やブレインフォグなど精神的・神経的症状を訴える患者が多い背景には、コロナ特有の社会的な問題があるとみており、「仕事を解雇されたり、上司に非難されたり、家庭や職場に感染を広げてしまったことを悔やむなど、感染者は精神的、経済的に不安定になりがちでストレスが大きい」とし、家庭や職場に理解がある場合は後遺症が起きにくいと分析している。

こうした後遺症は脳を含めた全身の炎症や免疫反応で起きていることもあるといい、尾形院長は「全てがメンタルの問題とするのは間違い。症状の軽い傾向があるオミクロン株だからと甘く見ない方がいい」と訴えた。(内山岳志)